

Ⅶ 特 論

1 中部高地千曲川水系の弥生集落の繋がり

—長野県佐久地域を中心として—

小山岳夫(長野県北佐久郡御代田町教育委員会)

(1) はじめに

近年の大規模開発にともない長野県内でも多くの弥生時代集落が発掘された。しかし、その発見例の多くは各盆地の平坦部に集中しているため、中部高地の弥生時代における高地性集落など高所の遺跡の実態についてはいまだ不明確と言わざるを得ない。群馬県に接する長野県佐久地域で集落跡が盆地に偏在する傾向を打ち破り、高冷地や山上などそれまでの未開地に分布域を拡大するのは、日本列島に前方後円墳が築造される直前段階で、防御目的とされる環濠集落が発達するのも同じ時期なのである。

したがって、本稿では最大目的とされる中高瀬観音山遺跡をはじめとする群馬県と長野県の弥生時代後期後半の社会の関連について十分な検討ができないと思う。ここではとりあえず弥生時代において群馬県と最も共通要素が多い隣接地・佐久地域を中心として長野県内の状況分析を行うことにより、中部高地一円の弥生社会の結びつきを考察してみたい。

(2) 長野県の弥生社会

長野県は四方を急峻な山脈に囲まれるため、県外に到達するのはもとより、県内の他地域に移動するのにも苦労を要する。松本・伊那・諏訪・佐久・善光寺など県内5か所に形成される狭小な盆地はそれぞれに固有の気候・風土を持ち、現代でもそこに住む人々はそれぞれに異なった気質を具えている。

長野県の弥生時代後期は古くから異なった様相をもつ千曲川流域を中心とする『箱清水式』と、天竜川流域の『座光寺・中島式』土器に象徴される2大文化圏に別れると指摘されてきた。この基本的な骨組みは今でも変わらないが、近年の研究成果により同じ流域内でも土器に見られる特徴は小地域単位の個性が強いことが明らかになった。

A 善光寺平

千曲川流域の中核地域と目されるのは県内最大の沖積地をもつ善光寺平南部である。千曲川の氾濫による数次の洪水砂の流出により厚く覆われているため、近年まで弥生集落は実態不明確であったが、高速道等の発掘により長野市松原遺跡で巨大な環濠をもつ弥生中期後半(畿内Ⅲ様式新～Ⅳ様式)の集落が姿を見せた。ちなみにその規模は集落域のはほぼ全容が判明している佐久平の最大集落北西ノ久保遺跡の5～6倍(竪穴住居址総数推定で450～540棟、一時期ではないので注意)に達しようというものであった。おそらく千曲川流域でこれを上回る大集落跡はないと考えられ、後期に至ってもこの状況は変わりそうにない。また、この時期、環濠をめぐらす集落が存在するのも県内唯一である。生産遺跡は石川条里・川田条里遺跡などで弥生時代の広大な水田址が発見されている。

県内の弥生集落規模No.1の善光寺平南部では時間の推移に伴う後期弥生土器の変化も実に迅速で、高坏に見られる畿内要素の取り込みは周辺他地域よりもいち早く行われる。他器種の壺・甕なども縄文の払拭、縄文への転換の速度は他地域を圧倒している。

以上のように集落規模・水田址に見られる経済力、環濠の掘削や土器に見られる西日本的要素の先取性な

ど善光寺平南部の弥生社会は千曲川流域において文化的に卓越した地位にあったことが予想される。次に流域周辺地域の状況を観察してみよう。

新潟県を北に接する善光寺平北部の中野や飯山地方など千曲川上流域の河岸段丘に立地する弥生集落は、盆地の狭小さも相まって、その規模は南部に遠く及ばない。環濠も現状で未発見である。竪穴住居形式及び土器様相は地理的に北へ向かうほど北陸色を強く被る傾向にあり、西日本的要素の先取性が当地において強く発揮されるように思えるが、高坏の型式変化(畿内V様式系への転換)はむしろ善光寺平南部より若干遅れるようだ。このような状況から善光寺平北部～飯山地方にかけては、信濃弥生時代の西日本的文化要素導入の玄関口として役割が大きいものの、在地文化の中心地および発信地とはなり得なかったと考えられる。

B 上田・佐久地域

千曲川上流域には上田・佐久盆地がある。上田盆地では不思議なことに現在の発掘調査はもとより、過去の既出資料にも中期後半の資料がなく、本格的弥生集落の造営は後期後半に至ってからである。集落経営が開始されると、その規模は爆発的な膨張を見せ、善光寺平南部、松本盆地に継ぐまでに発達するようである。土器様相は千曲川左岸・上田盆地西部の広大な沖積地塩田平においては善光寺平南部的な様相に近く、千曲川右岸・上田盆地東部の浅間山麓裾野のやや狭隘な台地では後述する佐久盆地東部との共通性を色濃く見せている。

関東の玄関口佐久盆地では、千曲川を隔てた東と西の地域で土器様相・竪穴住居に用いられる炉のありかたに差異が認められることが明らかになってきた。群馬県との関連を考える上での重要地域であるので特に詳しく記述しておこう。当地では東は浅間山麓裾野の狭長な台地、対して西は八ヶ岳北東麓末端の低丘陵地帯に弥生集落が立地する。東の土器様相は『箱清水式』の先行型式後期初頭の『吉田式』文様要素を後期後半、古墳時代初頭にまで継承することに特徴付けられる。壺の頸部には矢羽状の篋描文、甕には横羽状の櫛描斜走文が好んで用いられる。一方、西では『吉田式』の旧態要素が残ることは少なく、高坏の型式変化の後進性を除けばその様相は善光寺平・上田盆地西部に近いものである。炉は東では石で囲う、火床に土器を敷くなど佐久地域独自の組み立てを行うのに対し、西では善光寺平の弥生住居に採用される地床炉が一般的である。

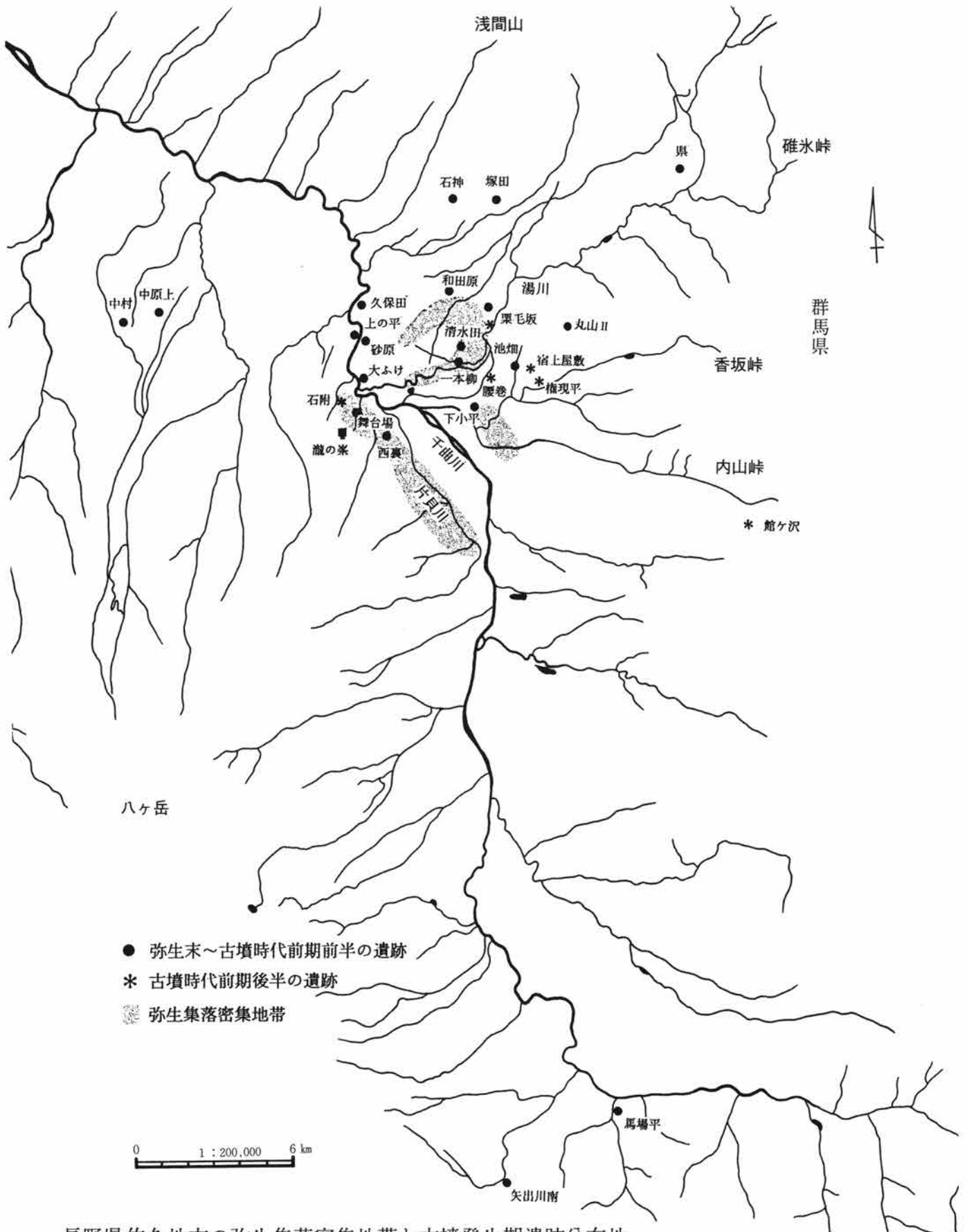
C 長野県弥生後期社会の状況分析

佐久盆地の東における土器型式の停滞性は千曲川流域では中核地善光寺平から最も遠隔地にあたるため、地域の独自性が強化された結果、生じた現象とも考えられる。現実には佐久以外でも前述の飯山や大町・松本・諏訪など善光寺平から遠く離れる地域ほど『箱清水式』土器の基本からの離脱が大きくなる。松本・諏訪などは伊那の『座光寺・中島式』土器分布域との接触地にあたるため、『箱清水式』『座光寺・中島式』の折衷型式が作られる。

また、県外にまで目を向けると群馬県の場合、中期後半では千曲川流域と同じく栗林式土器を起点に持ちながら、地域社会の発展に伴って『箱清水式』とは分化した独自の変化を遂げた後期弥生土器型式『樽式』を成立させている。山梨県で発見されている中部高地の系譜を引く後期弥生土器群についても同様であろう。このように土器様相からみた中部高地一円の弥生土器は社会的に成熟したと考えられる後期にいたり、同じ系統下にありながらそれぞれに小地域に根ざした個性的な展開を見せている。そしてその傾向は中核地帯と目される善光寺平から遠ざかるほど強くなるのである。

ところでここで注意を要するのが佐久平の西側の状況である。前述のように佐久育ちではない、善光寺平南部的色彩をもつ土器文化が西側に存在している事実は、同じ盆地内にありながら川を隔てて違う集団が存

1 中部高地千曲川水系の弥生集落の繋がり



長野県佐久地方の弥生集落密集地帯と古墳発生期遺跡分布地

在するを感じさせる。善光寺平の文化要素が間近に見えるにもかかわらず、佐久固有の東側の集団はこれを甘受しようとはしなかったことになる。弥生時代後期後半に至ると盆地生粋の封鎖性の強い社会が確立されていたことを伺わせる現象である。

(3) 群馬県との連絡

前項では長野県の弥生時代後期は、小地域単位で独自性の強い社会が形成されていることが想定された。しかし、こうした情勢下でありながらも善光寺平南部と上田西部、上田西部と佐久西部、上田東部と佐久東部などは土器様相などの共通性が強く、隣接する地域相互の交渉は活発に行われていたことを示す現象も確認された。この小地域間交渉は単に県内にとどまらず、県外にも及んでいる。その具象として後期中頃の長野県佐久市周防畑B遺跡と群馬県富岡市南蛇井増光寺遺跡をあげることができる。

周防畑B遺跡は1時期20棟を越えると考えられる佐久盆地ではこの時期最大級の集落遺跡である。出土土器は千曲川流域の東側の特徴を備えたものを主体とするが、これらの組成中には『赤井土・吉ヶ谷式』と考えられる単節あるいは附加条縄文施文土器も含まれている。この系統の土器が確認された遺跡は今まで佐久で500軒以上の竪穴住居址が調査されているにもかかわらず周防畑B遺跡以外にない。

一方、南蛇井増光寺遺跡は後期のみの総数で181軒の竪穴住居址が検出され、その規模は更に膨張することが確実な群馬県最大級の巨大集落跡である。ここからは赤色塗彩される壺の頸部文様に矢羽状の篋描文を刻むなど、佐久盆地の東側と多くの共通要素を持つ土器群が多く発見されている。従って、当遺跡は、佐久盆地の弥生集落と強い接触を持っていたと考えられる。

ちなみに南蛇井増光寺遺跡の発掘まで、群馬県の弥生集落跡では顕著な信州系『箱清水式』土器は未発見であった。また、南蛇井増光寺遺跡とほぼ時を同じくして行われた上信越自動車道建設に伴う発掘調査で確認された中高瀬観音山遺跡をはじめとする弥生後期の近隣の諸集落でも、信州系土器の匂いはほとんど感じられない。このような状況から見ると峠を越えて長野―群馬間の交渉を持ち得たのは限られた大規模集落に過ぎなかったことになる。当時における両地域の関係は地元代表格の集落同志の一本のラインで繋がっていたに過ぎなかったであろうか。

(4) まとめ

弥生時代の長野県は土器様相の違いこそあれ、東隣の群馬県とは「中部高地型櫛描文」という土器文様に見られる基本的共通要素で結びついている。従って、文化的発信地と考えられる善光寺平の情報が何らかの形で群馬県まで伝達されていたことを想定しても良いだろう。ただし、その伝達方式は前項までに検証されたように善光寺平から群馬県までストレートに繋がるようなものではなかったようだ。長野県千曲川流域から群馬県にかけては『箱清水式』の本流を基本とする《善光寺平北部←善光寺平南部→上田盆地西部→佐久盆地西部》、『箱清水式』の先行型式『吉田式』の旧態要素を保守する《上田盆地東部←佐久盆地東部→群馬県富岡市（南蛇井増光寺遺跡のみ）》など盆地単位を越えた個性的な土器をつくる小地域が形成されており、その小地域の連鎖的な交流が情報伝達の基本となっていた可能性が高い。

善光寺平で発信された情報は、先の佐久市周防畑B遺跡、富岡市南蛇井増光寺遺跡の状況から見て、佐久平西部を経由して、佐久平東部から間接的にもたらされた可能性が高い。この結果、現代の伝言ゲームのように発信源からの情報は必ずしも正確に伝わらないこともあったために、遠隔地ほど土器様相に見られる地域的個性がより発揮されることになったのであろう。

なお、冒頭で述べたように今まで佐久地方で確認された群馬県や山梨県に通じる古代の峠や道筋に点々とある高冷地・山上の小集落や磨製石鏃の散布地の多くは古墳発生期に位置付けられることが確実な状況で、

本稿で目的とする中高瀬観音山遺跡で集落が営まれた時期『樽式』2・3期とはずれが生じている。このため、本稿では詳述しなかった。山間部についてはまだ未解明の部分が多いため、まったくないとは言えないが、少なくとも中部高地の弥生時代における高冷地・山上の遺跡は古墳時代に比べると発達をみる段階にいたっていない。短期間で行き来可能な小地域間の交流にとどまっていたと考えられる封鎖性の強い当地の弥生社会では、峠路に集落を置く必然性がなかったようにも思えるのである。

小稿を執筆する機会を与えて頂いた坂井隆氏には資料調査などでたいへんお世話になりました。記して感謝致します。

【註】

- 1 佐久平の古墳発生期における遺跡立地については拙稿、1994「素描 弥生社会解体に伴う集落の拡散」『長野県考古学会誌』74に詳述しているので参照されたい。
- 2 善光寺平南部の弥生土器編年については千野浩、1989「千曲川水系における後期弥生土器の変遷」『信濃』3・41-4(3)に詳しい。
- 3 群馬県の弥生土器編年については、飯島克巳・若狭徹、1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』3.40-9に準拠した。

参考文献

- 千曲川水系古代文化研究所編、1980『編年』
 長野県埋蔵文化財センター、1988～1990『長野県埋蔵文化財センター年報』5～7
 飯山市教育委員会、1992『上野遺跡4』
 長野県埋蔵文化財センター、1994「栗林遺跡・七瀬遺跡」『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』
 長野県考古学会、1992『中部高地における弥生集落の現状—長野県考古学会30周年記念大会資料集』
 佐久考古学会、1990『赤い土器を追う』
 長野県、1982『長野県史 考古資料編主要遺跡(北・東信)』
 群馬県埋蔵文化財調査事業団、1992『南蛇井増光寺遺跡1』
 山梨県教育委員会、1987『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)』